

# 枕団子と死者の想い

山田慎也

Makuradango and Thoughts of the Dead

YAMADA Shin'ya

- ① 作法書にみられる枕団子
- ② 民俗研究における位置づけ
- ③ 死者の寿命をよむ団子
- ④ 団子と新たな死者
- ⑤ 饗供と死者の命運

## 【論文要旨】

枕団子は、枕飯とともに死者の供物として用いられ、作法書などにも取り上げられている。また、東京などでは葬祭業者が用意することもある。さらに、各地の事例を見ると、そのあり様は変化に富んでいる。従来、白の廻し方や粉の作り方、かまどの使用法など通常の作り方とは異なる特別な製法や、その数などについては、民俗研究の中で注意が払われてきた。だが今回主題とする、団子の色の変化などを通して死者の想いや寿命を占う民俗については、研究上ほとんど触れられることがなかった。

こうした要因について、柳田国男の指摘がその後の方向に大きな影響を与えたと考えられる。柳田は、共食と忌みの観念について、死者の食べ物はそれを分けて食べることよって特別な効果が及ぶことで、それを分け与える人と、受け取らない人の区分が生じてきたと理解し、枕団子は死者への食物の一つとして枕飯とほとんど同一視していた。そしてその後の研究において、枕団子自体に注目したのは、五来重など一部の人々であった。五来は枕飯を死者のための鎮魂のための依り代とし、枕団子を死者以外の

邪霊的な存在に対する饗供とする視点を打ち出すことで枕団子の性格を分析した。

ところで、民俗誌をみると秋田県を中心に青森県、山形県において、枕団子の色が黒くなると、死者の寿命であったと判断する地域が多い。その一方で、黒くなると死者の心残りがあった、悔いが残っているなど、死者の想いを判断する地域もあった。この判断は対照的ではあるが、死をめぐる残された生者の評価であり、死者の想いを生者がさまざまに思い描くことで、死んだという事実を受容する一つの民俗であったと考えられる。

さらに枕団子の変化によって新たな死者が生じるかを判断する伝承もあり、このような信念は、五来にいうように枕団子が邪霊的なものに対する饗供であり、死者の命運を知りえる存在であることを想像させるものであり、枕団子についての更なる検討が必要であると考えられる。

【キーワード】 枕団子、忌み、死、供物、死の受容

## ①作法書にみられる枕団子

枕団子は、亡くなってすぐに死者の枕元に供える団子で、死者への供物としてひろくみられるものである。例えば、明治三六（一九〇三）年に亡くなった作家尾崎紅葉の葬儀写真集『あめのあと』の「往生」の場面では、枕飾りとして小机に焙烙の線香立てや一本櫛とともに枕団子がみられる。現在では、葬儀の場が斎場に移行するようになるにつれ、葬祭業者によって枕団子が用意されることもある<sup>(1)</sup>。枕団子は、実際には地域によって多様であるが、葬儀の作法書<sup>(2)</sup>でも取り上げられることが多く、大ベストセラーになった塩月弥栄子『冠婚葬祭入門』でも一膳飯の項目のなかで以下のように述べられている〔塩月 一九七〇 一一九〕。



写真1 千葉県銚子市の枕団子

208 一膳飯には故人愛用の茶碗に箸をつきたてる。  
「北枕に寝かせた遺体の枕もとには、逆さ屏風を立て、その前に小机をおいて花の一輪さし、香炉、燭台、水、一膳飯、団子などを供えます。（以下略）」

この項目のテーマは枕飯に関する記述でありながら、同時に枕団子に

ついても言及していることがわかる。また、主婦と生活社『都道府県別冠婚葬祭大事典』（一九九二）では、題名の通り都道府県別の儀礼の特徴を取り上げつつ作法書になっているもので、「都道府県別危篤・臨終から納棺まで」という節の中で、関東地方のリード文に「合理化が進んでいる東京でも枕飯やだんごは供える」とあり〔山村編 一九九二 二八三〕、もともと枕団子の慣習のない地域を除いて、なお根強く続けられている習俗ともいえる（写真1）。

しかし枕団子に関する民俗は単に団子を供えるだけではないようである。冒頭に示した塩月の『冠婚葬祭入門』（一九七〇）では、以下のようになっている。

「だんごは米の粉をこねてゆであげます。昔はゆでるときに白くきれいに上がれば、死者はこの世に未練なく成仏したとし、黒っぽくゆで上がれば、あきらめきれずに死んだ、とされてきました。だんごは白紙を敷いた白木の三方にのせて供えます。」〔塩月 一九七〇 一一九〕

つまり、団子の出来具合を見て、死者の想いや心残りを判断するのである。こうした枕団子をめぐる判断について、単に『冠婚葬祭入門』の著者である塩月の個人的な思いこみとはいえないのである。実は、ある程度広がりをもつ民俗であることが調査報告書などからわかってきた。だが、民俗学の葬制研究においては、従来あまり触れられることのなかった民俗でもある。そこで本稿では枕団子の研究をたどっていく中で、死者の命運を判断する民俗を検討し、生者の間での死の受容の問題について考察を行うものである。

## ② 民俗研究における位置づけ

それでは、民俗研究における枕団子の位置づけについて見ていきたい。まず、『日本民俗大辞典』〔福田他編 二〇〇〇〕では以下のようにある。

「死後すぐに死者の枕もとに供える団子。枕飯と同様に、死者が出るとすぐに死者の近親の女性などが作るものとされる。両方を供えるところ、枕団子だけ供えるところがある。枕団子は生団子であることが多く、その作り方は、別火にしたり、白を左に廻して挽くなど、一定の作法を伝える例も多い。枕団子は六個、四四の十六個などの数で作られるが、納棺したり、墓に供えたり、川に流したりされる一方で、これを食べると度胸がよくなるとか、老人のものはその齢にあやかることができるといわれることがあった。」〔青木 二〇〇〇 五六五〕

『日本民俗大辞典』の項目では、団子の作り方について多様な方法があり、特に製作の際の別火について取り上げている。さらに生者が枕団子を食べることによって、度胸がよくなったり、長寿にあやかることができるとの俗信についても記述されている。これは後で述べる『葬送習俗語彙』〔柳田 一九三七 二七〕の記述を基本にしていると考えられる。しかし、遑って大塚民俗学会編の『日本民俗事典』〔一九七二〕になると、「枕団子」という項目はあるが、それに対する内容の記述はなく、「↓枕飯」と枕飯の項目を参照することとなっている。そして枕飯の説明が一通りなされたあとで、「枕団子と重複する面が多い」とされ、枕飯と同種の供物としての取扱いがなされている〔佐藤 一九七二 六六六―六六七〕。つまり枕団子は枕飯の中に含まれるものとしての扱いなのであった。

さらに中山太郎編『日本民俗学辞典』〔一九八〇（一九四一）〕には枕飯の項目自体がない。そして、柳田国男編『葬送習俗語彙』〔一九三七〕では、「マクラダング」は民俗語彙として以下のように述べられている。

「枕団子は枕飯と重複して、又は前後して共に作る土地も多いやうである。相州津久井郡辺では、死者の枕元に六つの団子を置き供へる。本来は内庭へ梯子を逆さに掛け、白を左廻りにまはして白米の粉を挽いて拵へたものだが、近頃は大抵米の飯を丸めたものを以て代用する。これを食うと度胸がよくなるといふ（葬号）。佐渡の河原田町では前記の如くホトケメシも供えるが、別に団子を作る。死人があつて寺行きの使を出す前に勝手元で之を作る。其数は四々の十六箇、老人の枕団子は其齢にあやかりたいといふものがあつてよく盗まれる。何度供へても一つもなくなることがある（葬号）。死弁当を作る伊予の北宇和郡御横村でも、同時に急いでオマルメと称する団子を作るといふ。」

と『日本民俗大辞典』の説明のベースとなっており、団子の製法やそれを生者が食べることに関する俗信などが述べられている。以上のように辞典類では、枕団子が作られる時期やその製作方法については記述されているが、それ以外についてはあまり触れられていない。この傾向は『葬送習俗語彙』〔柳田編 一九三七〕から生じた視点が、受け継がれていったものと思われる。こうした辞典の傾向とともに、枕団子は葬制研究の中でどのように位置づけられてきたのだろうか。柳田国男は『旅と伝説』〔誕生と葬礼号〕〔一九三三〕の巻頭論文において「生と死と食物」を執筆しており、そのなかで葬送についての食べ物を取り上げている。死亡と食物との関係は二つに分かれるとされ、その一つが死んだ者に食わせるものとして、「枕

飯」「枕団子」、又は野辺送りに持って行く色々な食物」であり、枕団子を枕飯などとともに挙げていたのであった〔柳田 一九九八（一九三三）二一三〕。

しかし枕団子自体が分析されているわけではなく、食物を通して共食と忌みの観念の關係について論じており、「食事は通例の日には一家集まつて共に食ふのが習ひであつた。節供即ち式日の食事は、神も祖先の霊も主人眷属と共に相饗する。たゞ亡者の新たに摂取する營養のみは、是を共にする者に特殊の効果を生ずと考へられて居た故に、自由に居合わせた者に分つことが出来なかつたらしいのである。」として死者の食物が特定の人だけに限定されていたことを指摘する〔柳田 一九九八（一九三三）三三〕。

こうした共食の観念からの分析であるため、それが枕飯であろうが、枕団子であろうが、その種類を問うことはなく、それよりもそれをわけて食べるべき人とそうでない人の区分と、後に忌みの観念が衰退していく理由を分析するように展開している。

柳田の枕飯や枕団子についての分析の視点は、葬制研究の井之口章次にも受け継がれており、やはり枕飯と同じものという認識であつた。井之口の『仏教以前』（一九五四）では、その姿勢がよく表れている。

「枕飯とは別に枕団子というのである。多くの地方では枕飯と枕団子とは平行して、ともに供するものであるが、枕飯のみ、あるいは団子のみのところもある。枕団子に重点を置く地方では、玄米を洗わずに、白を左廻りに、などの作法をとめない、死後ただちに供する。枕飯にも枕団子にも重要な意味を持たせている地方と、一方のみに重点を置いている地方の違いはあつても、とにかくどちらか一方は、単なる供物以上の意味を負わされているのだから、今は双方を総括して、仮に枕飯として議論を進めていく。」〔井之口 一九五四 五八〕

井之口は枕飯と枕団子の地域差について触れ、製作方法についてはそれが特別な供物であることを意識しているが、結局枕団子も同じものとして扱っており、それほど差異は感じていないことがわかる。そして枕飯を単に死者の供物とせず、「死んでしまった脱け殻に飯を供えて見たところで意味がない。枕飯は食べ物でありながら、呪術的な色彩の濃いものであり、しかもその呪術の目的は死者を蘇らせることであつたと考えられる。」として、枕飯同様、死者の魂呼びの一つとしている〔井之口 一九五四 五八一六一〕。

また新谷尚紀は、『日本人の葬儀』（一九九二）のなかで「米の靈力」として葬儀における米の役割を取りあげ、死者の米、生者の米、生者と死者をつなぐ別れの米と分類し、死者の米の中に「枕飯・枕団子」が記述されている。枕飯の特別な作り方について述べ、「枕団子は四個とか六個とか地方ごとにさまざまであるが、石臼をふだんどちがって左廻りにひくなどしてつくる。枕飯と枕団子をいっしょに供える例も多いが、どちらか一方だけという例もある」となつて〔新谷 一九九二 三三—三四〕、やはり枕飯との差異は地域別のこととして取り上げるのみで、枕飯・枕団子は一括して死者の供物の領域を出るものではなかつた。

ところが、五来重は枕飯と枕団子を一緒にすることなく、両者の性格の違いをきわめて対照的に捉えている。五来は死者が遊離するため、それを呼び鎮魂するための依り代が枕飯であり、静かに留まってもらうためのものであるとする〔五来 一九九二 七五一〕。そして枕飯は死霊を供養して荒魂を鎮魂する「霊供」であり、一方、野飯は浮遊する霊、いわば餓鬼に饗して葬送を妨害させないための「饗供」であるとした。これは陰陽道の道饗祭が入つたもので、まともな供養を受ける死者の霊に妨害を加え、霊を横取りして自分の仲間に入れようとする霊で、それが伝承として残り、これを火車にとられるといったり、猫に化けて取りに来るといったりした。よつてそれに近づくのを防遏するための呪術が、



刃物や箸、また墓地の入り口に供える霊膳（野飯、道飯、六道餅）であるとする〔五来 一九九二 九〇三―九〇六〕。

そして五来は、霊供や饗供の団子は、生粉の団子でシトギであったと想定している。さらに枕飯が鎮魂のための霊を依りしめる依り代とするならば、枕飯だけでよいのに、枕団子が複数作られるのは、他の目的があったとして、野膳のように墓地への道の辻において、餓鬼たちへの饗供としたものであったと理解している〔五来 一九九二 九一九―九二三〕。

こうした五来の説を受け、田中宣一は日本の祭りが主たる神以外にも、祭りを乞おうとして訪れる、歓迎されざる雑神もまた祭っていたという視点から葬送儀礼を分析し、枕団子がいち早く作られるのは、死者の鎮魂を障りなく行うことができるよう、餓鬼や無縁などの雑神へのホドコシと捉えている〔田中 二〇〇五（一九九九）〕。

こうしてみると、枕団子は、柳田以来、忌みと食物との連関から注目されてきたことにより、原料が同じ米である枕飯と同種のものとして扱われてきた。つまりそうした発想からは、枕飯も枕団子も差異は生じてこない。しかし、五来や田中は、このような違いのある食物を一緒にすることはできず、両者をまた米という食物よりも、供える対象となる死霊の性質の違いからこれを解釈したのであった。

### ③ 死者の寿命をよむ団子

ところが、『冠婚葬祭入門』（塩月 一九七〇）でも述べられているように、枕団子の状態によって死者の寿命や想いを判断する民俗が作法書にも記されているのであった。それでは実際の伝承では、枕団子と死者の想いはどのように捉えられてきたのであろう。実はこうした観念は東北地方を中心に色濃くみることができるのであり、各地の事例をみてい

きたい。

#### ① 青森県東通村老部

早団子 死人が出ると仏間に布団を敷き、北枕に寝かせ、屏風を回す。親戚や知人に、死人が出たことを告げる告げ人が葬家を出ると、早団子をつけて供える。身内の女性が二、三人でついて作った。粳米を茶碗で一つ、磨いですぐはたく。白に人数分の杵をそろえて立て、交互につく。ついた米を湿して径二センチくらいの団子を作り煮る。それを皿に盛り、枕元に線香とともに供える。モンジャ（死者）が葬家にいる間は、すべて平盛りにし、葬式まで供えておいた。老部などでは、早団子が黒いと「シニゴウ（死に業）だ」といった〔東通村史編集委員会編 一九九七 五四〕。

#### ② 青森県野辺地町有戸

ハヤダンゴは茶碗に盛るが、崩れると縁起が悪いといい、団子の色が黒いと「死に目で死んだ」、白いと後を引くといって嫌がられた。〔宮良編 一九九一 二二〇〕

#### ③ 秋田県大館市櫓崎

早ダンゴはクロゴメでつくったが、できたダンゴの色が黒ければ亡くなった人の命は寿命で、白いようだはまだ寿命ではないのに、まだ死ぬときでもないのに、といったものである。更にそのダンゴの色が変わるようであれば、人が続いて死ぬともいう。早ダンゴは埋葬の時に墓まで持って行き供えてくる。それを烏や犬が食べてしまうようだといいが、いつまでも供えたところに残っているようだ、人が死に続くものだという。それは烏や犬が急いで食わなくとも、またすぐとむらいがあることを予知し、のんびりしていられるからだという。〔大館市史編さん委員会編 一九八一 九八〕

④ 秋田県能代市

上母体では、早団子の色は寿命を表していると言われていた。と言うのも不思議なもので長生きした人の早団子はすぐに黒くなり、葬列は出発する頃には真っ黒になった。これに対し若死にした人の早団子は白いままであった。長生きした人の早団子は、家から葬列が出発すると皆がもらいに来た。これを食べると長生きする、子供の百日咳に効く、と信じられていた。新田では、「寿命で死んだ人の早団子は黒くなる」といわれ、どの人の早団子も供えるときに黒くなったから「ああ、あの人は寿命だったのだ」と納得したものであった。同所には、上母体のように長生きした人の早団子をもって食べたという話はない〔能代市史編さん委員会編 二〇〇四 四六九〕。

⑤ 秋田県上小阿仁村

クロダンゴ クロダンゴ、ハヤダンゴ、マクラダンゴなどと言い、人が死ぬとすぐに親戚の人や近所の人を作る。これは、茶碗一杯ぐらいの玄米を水で洗い、ウスで搗き、練って丸めてダンゴにするもので、六個作り、茶碗に山盛りにする。ダンゴの数は十五個作るところや、特に決っていないところもある。小沢田や小田瀬では、盆の上に横から見ても上から見ても、三角形に見えるように積みあげ、枕元に供える。大海や大林では、玄米の粉を使わずに、小麦粉でこのダンゴを作ることもある。ダンゴが黒くなると「寿命で死んだ」といい、あまり黒くならないと「寿命ではない」という〔祐川編 一九八〇 一二三―一二四〕。

上記の①から⑤までは、基本的に枕団子が黒くなるとそれは死者の寿命であったとするものである。それでも単に寿命という表現だけでなく、①青森県東通村老部では、「シニゴウ（死に業）」といったり、②青森県野辺地町有戸では、「死に目で死んだ」といったり、団子が黒いと死ぬ

べき運命だという理解となることがわかる。③の秋田県大館市横崎では、「寿命」であり、④の秋田県能代市では、長生きした人、寿命で死んだ人の団子は黒くなるとう。⑤の秋田県上小阿仁村では、団子が黒くなると寿命であるとして、団子の色が黒くなると死すべき運命であったとしている。

それとは異なる判断が⑥以下の事例である。

⑥ 秋田県秋田市土崎

人が死ぬと直ちに枕元に供えるといつてシラ団子（ダンゴ）をつくるものである。シラ団子は生米をうるかして臼で搗いたもので、七個の団子状にして、これを飯茶碗に盛りつけたもの。時でもなく臼で搗く音がすると近所では人が死んだことを察したという。供えたシラ団子の色が黒くなって変わると、死人はまだこの世に名残を遺しているものという〔秋田市史民俗部会編 一九九八 九八―九九〕。

⑦ 秋田県秋田市新屋

死人があると直ちに作るものがシシリ団子というものである。シシリ団子は麦の粉を練って団子にして茶碗に山盛りとする。死人の枕元に上げるという意味だが、この団子の色が黒ずんで変色すると、いまだ死人がこの世に遺り有（エ）ものだといってきた〔秋田市史民俗部会編 一九九八 九九〕。

⑧ 秋田県本庄市小友・石沢、荒町（秋田県由利本荘市）

枕元に供えたダンゴが黒くなったり、団子の色が変わったりすると死者に心残りがあつたためだといわれた〔本荘市 一九九〇 一四〇〕。

⑨ 秋田県本荘市子吉地区埋田・葛法（秋田県由利本荘市）

枕ダンゴ 枕元に供えたダンゴ（団子）の色が白くなると、死者の心のこりはないが、黒くなるば心のこりがあるといわれている〔本荘市一九九一―一三三〕。

⑩ 秋田県本荘市南内越・北内越、紫野、内越（秋田県由利本荘市）

うるち米をうるかし（潤し）て白に入れ、千本つき（味噌搗き棒ともいった）ではたく。この時のはたく音は、亡くなった人にもうこの世の人ではないことを知らせる音でもあるという。はたき終わった米は平たくして白いダンゴをつくり死者の枕元に供えた。このようなダンゴをつくる一連の作業を「ダンゴをはたく」といった。また枕団子が黒く出来上ると、死者はノコレクテ（悔いを残して）亡くなったのだといわれた〔本荘市 一九九二 八七〕。

⑪ 秋田県男鹿市脇本

ハダカダンゴ 死後直ちにこくるダンゴ。ウル米を水に浸し、コジキ臼を用いキギ（杵）で一人ではたいて粉にする。その粉を丸めてゆでて一盆に盛る。一晚、仏に供えて黒くなると、再び不都合が出るという。そのため、きれいな粉や湯を吟味する。色が黒くなると、残れねえなあと言って、死人がこの世に心残りがあると判断する。四花の場合には頭を垂れると不都合〔大島



写真2 秋田県男鹿市の枕団子

編 一九八五 一〇七）（写真2）。

⑫ 秋田県横手市

枕団子 亡くなるとすぐ神棚の扉を閉めて白紙を貼るとともに、枕団子をつくる。団子は白玉粉などでつくったりしたが、以前は団子が黒くなると心残りがあつたなどと死者の気持ちを推し量ったりしたこともあつたが、最近あまり気にしなくなった。また枕団子は身内の人が七つづくる。これは一週間ごとに替えられた。枕団子は、普通「カタハタキ」と称し、ウルチ米を使い、杵を横打ちしないで搗くものとされた〔横手市史編纂委員会編 二〇〇六 四三七―八〕。

⑬ 秋田県鹿角市花輪

団子の色は未練を残した（寿命でない）死に方をすると色が黒くなる〔鹿角市総務部市史編さん室編 一九九二 四四〕。

⑭ 山形県村上市

枕団子は「しんこ」（洗った白米を乾かして石臼で粉にしたもの）に熱湯を加えてつくる。葬礼の斎壇の供物で毎日つくり直して供えた。しんこ団子は葬式団子といわれ、死人が現世に未練がある時は黒ずんだ色になり、家族から看取られながら臨終したときの団子は「白い」といわれた〔村山市史編さん委員会編 一九九六 三四六〕。

⑮ 山形県羽黒町（山形県鶴岡市羽黒町）

この町では一般にいう枕飯ではなく、枕団子というものをあげる。数は決まっておらず、粉をひいた分だけ作りあげる。若死にをした人の枕団子は黒くなるといわれている〔跡見学園短期大学民俗研究部編 一九六八 五二〕。

以上の⑥秋田県秋田市土崎から、⑮秋田県羽黒町までが、基本的に団子が黒くなると死者はまだ未練があるとするものである。⑥秋田県秋田市土崎では「この世に名残」、⑧秋田県本荘市小友・石沢地区荒町、⑨秋田県北条市子吉地区、⑫秋田県横手市では「心残り」、⑬秋田県鹿角市花輪では「未練を残した(寿命でない)」、⑭山形県村上市では「未練がある」となる。このほか現地の言葉で⑦秋田県秋田市新屋では「未練死人がこの世に遣り有(え)もの」というし、⑩秋田県本荘市南内越・北内越では「ノコレクテ(悔いを残して)」、⑪秋田県男鹿市脇本では「のこれねえなあ(心残り)」となり、いずれも未練や心残りがあると同義である。また⑮山形県羽黒町では「若死にした人は黒くなる」として、夭折した死者の思いが出ることを示している。

#### ⑯ 岩手県宮古市

「野団子(ノダンス・ノダンシ)」とは黒色の米の粉の団子で、数えずにちぎって作る。米は水でふやかさずにすりこ木などでつぶし、炭と湯を入れてこめ、丸めてゆでる(山口)。団子を黒くするために炭(荒巻・山口)の他、竈の鍋底の煤(牛伏・岩船)、墨汁(佐羽根)なども用いる。野団子は数えずに作り、出来あがった団子の数で死者の寿命を占う。例えば一〇個や二〇個などのちょうど良い数だと「寿命だ」といい、一三個や一七個などの半端な数だと「まだ未練があった」、「生き足りなかつた」という。まわりの人々も野団子の数に関心を持ち、この数を聞きたがるという(山口・佐羽根)。野団子を作るのは臨終の時ではなく、葬式に時に蕎麦粉でつくるところもある(田代)。牛伏では野団子を食べると虫歯を病まないといった(宮古市教育委員会編 一九九四 四九三二(写真3))。

最後の⑯岩手県宮古市では、団子の色ではなく、できあがった団子の

数によって、死者の寿命を占っている。しかしこうした数での判断はいまのところ宮古の事例だけであり、むしろ団子の色によって判断することが多い。

以上の事例から、色による判断は秋田県に比較的多く、その周辺である青森県と山形県に散見される。また数の判断として、岩手県宮古市の報告例があり、基本的には色による判断が中心であることがわかる。

さてそれでは団子が黒くなることについての判断は、大きく二つに分かれることがわかる。まず黒くなると、①から⑤の地域の事例のようにそれが「寿命である」という判断である。しかし寿命という肯定的なものだけではなく、①青森県東通村老部のように「シニゴウ」というと、業というからにはやむを得ない、もしくは仕方ないというという意味合いの方が強い。寿命というのはそうした点で、②青森県野辺地町有戸のように、「死に目で死んだ」と言うことになるのである。それは天寿を全うするだけでなく、死病に冒された者が長く病床に伏せた後に死んだことも含みうる判断でもある。

その一方で、⑥から⑮の地域の事例は、団子が黒くなると死者の未練や心残りがあったとするものである。その意味合いは死者の想いであり、この世に未練があったとするものや、心残りがあったとするもの、⑩秋田県本荘市南内越・北内越のように、「ノコレクテ」といったり、⑦秋田県秋田市新屋では「未練死人がこの世に遣り有(え)もの」というのもいずれも、心残りであるという判断である。

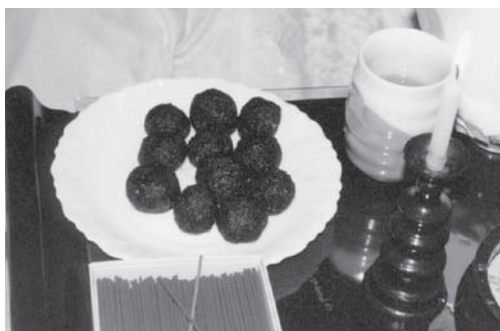


写真3 岩手県宮古市の野団子



心残り、未練という死者の思いの対局は未練がないというものであるが、⑬秋田県鹿角市花輪のように「団子の色は未練を残した(寿命でない)死に方をすると色が黒くなる」として、「未練がある」と「寿命であった」は、実は対照的な発想でもあったことがこの記述からうかがえる。それは⑮の山形県羽黒町の判断である「若死にした人の団子は黒くなる」ということからわかるのであった。

ただし若死にした人自体の思いが未練がある、心残りがあるということとは、多くの場合そうであろうが、その意味の広がりには仕方ない死へも広がっていく可能性を残している。つまり、白黒の判断は様々な死への想いを生者の側で受け止めるものが枕団子の色合いである。

これらの報告では、実際にはどのような状態で判断しているのか不明な点も多く、団子の変化は物理的に異常な状態なのか、人々の解釈に依存するものなのかはよくわからない。しかし考えてみれば、米や小麦で作った団子は時間がたてば硬化して表面は変化し、色合いもそれなりに変わってくるものである。団子の色が変わ化したと見ようが、見まいが、すでに死という現実が発生した中では、その事実は受け止めざるを得ない。つまりどうしようもない事実の前で、その事実を受け止めるための解釈の材料となっていたとも考えられる。

それは残された生者にとつて、死者の死が寿命であろうが、なからうが、心残りがあろうが、なからうが、一人の死に際して様々な思いがあり、それを団子の色によってどちらにも解釈は可能であるほど、生前からの様々な記憶につながってくるであろう。その意味の広がりを団子の色の変化は持つており、それによって死者の思いを受け止めることで、残された生者もその死を受け止めていく、死の受容の過程であったと思われる。

#### ④ 団子と新たな死者

こうした枕団子の色の変化によって、団子を作る対象となった死者の想いを判断することがおもに行われてきたが、それだけでなく、新たな死者が出ることを予測することもあった。

##### ① 青森県平賀町(青森県平川市)

ハヤダングは、カタハタキの団子で、黒い色のものができると近いうちにまた誰か死ぬといつて嫌う。ハヤダングは水に浸した米を白で搗いた粉で作った。団子で早搗きをする音で死者の出たことがわかる〔平賀町誌編さん委員会編 一九八五 二六五〕。

##### ② 青森県野辺地町有戸(三五ページに既出)

ハヤダングは茶碗に盛るが、崩れると縁起が悪いといい、団子の色が黒いと「死に目で死んだ」、白いと後を引くといつて嫌がられた〔宮良編 一九九一 一一〇〕。

##### ③ 秋田県大館市櫛崎(三五ページに既出)

早ダングはクロゴメでつくったが、できたダングの色が黒ければ亡くなった人の命は寿命で、白いようだとまだ寿命ではないのに、まだ死ぬときでもないのに、といったものである。更にそのダングの色が変わるようであれば、人が続いて死ぬともいう。早ダングは埋葬の時に墓まで持って行き供えてくる。それを烏や犬が食べてしまうようだといいが、いつまでも供えたところに残っているようだと、人が死に続くものだという。それは烏や犬が急いで食わなくとも、またすぐとむらいがあることを予知し、のんびりしていられるからだという〔大館市史編さん委員

会編 一九八一 九八)

以上の三つの事例からではあるが、団子の変化のあり方はそれぞれ異なっており、①青森県平賀町の事例では、「黒い色のものができると近いうちにまた誰か死ぬ」といい、②青森県野辺地町有戸では「白いと後を引く」って色目は逆である。さらに③秋田県大館市横崎では、「ダングの色が変わるようであれば、人が続いて死ぬ」といい、さらに墓に持って行った早ダングが、いつまでも残っているようだと、やはり死者が続くという。その理由として「それは烏や犬が急いで食わなくとも、またすぐとむらいがあることを予知し、のんびりしていられるからだ」といつている。

このような発想は枕団子の性質について、五来重が指摘したように、餓鬼に饗して葬送を妨害させないための「饗供」であるという解釈を思い起こさせる(五来 一九九二 九二二―九二三)。その団子を受け取るべき餓鬼などをふくめた邪霊は、次の死者が出ることを知りうる存在でもあったと考えられる。例えば施餓鬼会の始まりとなっている(藤井 一九九三 二二五―二二六)。つまり死者の命運を知る存在であるという発想が根底にあったとも考えられる。そうすると枕団子が死者の命運や想いを判断するものとしてそれなりの根拠があったことも、考えられるのであった。

## ⑤ 饗供と死者の命運

枕団子は作法書にも記されるように、全国に広く見られる民俗であり、それは民俗研究の中でも取り上げられてきた。しかし研究上では、柳田が忌みの飯としての側面に注目したことで、枕飯と一体化した形で理解

されるようになり、以降、枕団子自体独自の位置づけについてはあまり関心が払われなかった。しかし五来重やそれを受けた田中宣一などが指摘するように、邪霊的な存在に対する饗供という視点は、さらに枕団子に関する様々な俗信を理解する上でも大きな示唆を与えるものである。枕団子を受け取るうとする邪霊的な存在は、一方でひとの寿命を知りうる存在であり、すでに死んでいった人の命運だけでなく、新たに死んでいく人についても知りうる存在であったと考えられる。よって、その供物となる枕団子は死者の命運と結びついていくのは自然な展開と思われる。そして邪霊的な存在を慰撫させるために、死後間もない段階でいそいで枕団子がつくられたのである(田中 二〇〇五(一九九九 二二七))。

こうした死後間もない段階で登場する枕団子によって、ひとびとは死んでいった人の命運を様々に判断しつつ、葬儀のプロセスを通して、死を受け止めていったのであり、枕団子は、生者の間で死を受容させるメディアとなっていたのであった。

### 註

- (1) 東京都に本社を置く冠婚葬祭互助会の平安祭典は、一九九五年当時、枕団子をすでに業者側で用意していた(山田 二〇〇七 二四四)。だがのちには枕飯も合わせて用意するようになる(山田 二〇〇七 二五八)。
- (2) 一九七〇年一月三〇日に初版が発行されたが、わずか一〇ヶ月後の一〇月一八日には二〇六版を発行している。
- (3) 白を通常の挽き方と異なり左回しにするという記述が、以後一貫してみられる。しかし左回りは反時計回りであり、これは通常の白の挽き方であり、異なるわけではない。
- (4) 「生と死と食物」は『食物と心臓』に収録され刊行されている(柳田 (一九四〇))。
- (5) 『山形県東田川郡羽黒町調査報告書』(一九六八)は編者はなく、発行が跡見学園短期大学民俗学部となっている。便宜的に跡見学園短期大学民俗学部編とする。

参考文献

- 青木俊也 二〇〇〇 「枕飯」『日本民俗大辞典』下、福田アジオ・神田より子・新谷尚紀・中込睦子・湯川洋司・渡邊欣雄編、吉川弘文館
- 秋田市史民俗部会編 一九九八 『秋田市史民俗調査報告書』(三)、秋田市史編さん室
- 井之口章次 一九五四 『仏教以前』古今書院
- 大島建彦編 一九八五 『男鹿脇本民俗誌』脇本地区市民憲章推進協議会
- 大館市史編さん委員会編 一九八一 『大館市史』第四卷 大館市
- 大塚民俗学会編 一九七二 『日本民俗事典』弘文堂
- 鹿角市総務部市史編さん室編 一九九二 『花輪・尾去沢の民俗』下、鹿角市史民俗調査報告書第六集、鹿角市
- 五来重 一九九二 『葬と供養』東方出版
- 佐藤米司 一九七二 『枕飯』『日本民俗事典』弘文堂
- 新谷尚紀 一九九二 『日本人の葬儀』紀伊国屋書店
- 田中宣一 二〇〇五(一九九九) 『枕飯と枕団子』『祭りを乞う神々』吉川弘文館
- 中山太郎編 一九八〇(一九四一) 『日本民俗学辞典』覆刻版、名著普及会
- 能代市史編さん委員会編 二〇〇四 『能代市史』特別編 民俗 能代市
- 東通村史編集委員会編 一九九七 『東通村史』民俗・民俗芸能編 東通村
- 平賀町誌編さん委員会編 一九八五 『平賀町誌』下巻 平賀町
- 福田アジオ・神田より子・新谷尚紀・中込睦子・湯川洋司・渡邊欣雄編 二〇〇〇 『日本民俗大辞典』吉川弘文館
- 藤井正雄 一九九三 『祖先祭祀の儀礼構造と民俗』弘文堂
- 本荘市編 一九九〇 『小友・石沢の民俗』本荘市史民俗調査報告書第一集、本荘市
- 本荘市編 一九九一 『小吉地区埋田・葛法の民俗』本荘市史民俗調査報告書第二集、本荘市
- 本荘市編 一九九二 『南内越・北内越の民俗』本荘市史民俗調査報告書第三集、本荘市
- 宮古市教育委員会編 一九九四 『宮古市史』民俗編上 宮古市
- 村山市史編さん委員会編 一九九六 『村山市史』地理・生活文化編 村山市
- 柳田国男 一九九八(一九三三) 『食物と心臓』『柳田国男全集』第十卷 筑摩書房
- 柳田国男 一九三七 『葬送習俗語彙』民間伝承の会
- 山村浩編 一九九二 『都道府県別冠婚葬祭大事典』主婦と生活社
- 山田慎也 二〇〇七 『現代日本の死と葬儀』東京大学出版会
- 横手市史編纂委員会編 二〇〇六 『横手市史』特別編 文化・民俗 横手市

(二〇一一年七月一四日受付、二〇一一年一月一日審査終了)

(国立歴史民俗博物館研究部)

## Makuradango and Thoughts of the Dead

YAMADA Shin'ya

Makuradango dumplings for the dead are used as offerings for the dead along with makurameshi bowls of rice for the dead. While it is mentioned in courtesy books and prepared by funeral directors in Tokyo, etc., its actual manner varies depending on the regions involved. Conventionally, folklore studies have focused on the special way of making makuradango, including how to grind it, the flour, using a furnace, etc. and the quantity of dumplings involved. However, they have hardly mentioned the folk customs involving reading the thoughts of the dead and the natural lifespan through the changing color of the dumplings.

The reason for the above is because since Kunio Yanagita, makuradango has been considered almost the same as makurameshi; namely one of the foods for the dead, based on the understanding that the concepts of eating together and taboo originated from the division of those who distributed food for the dead and those who did not receive them, because sharing and eating the food for the dead had special effects. Subsequently, it was only Shigeru Gorai who focused on makuradango itself. Gorai analyzed the nature of makurameshi and regarded it as an object for soothing the soul of the dead, while makuradango was seen as an offering of a feast for evil spirits rather than the soul of the dead.

Meanwhile, a folklore chronicle records some regions, mostly in Akita, and also in Aomori and Yamagata, where, when the color of makuradango changes to black, this is judged to represent the natural lifespan of the dead. Conversely, there are other regions where the color of makuradango is used to judge the thoughts of the dead, and when it changes to black, the dead are perceived as having regrets, etc. Although these judgments are contrasting, they represent an evaluation over death by the remaining living people. This seems one example of folk customs in which living people describe the thoughts of the dead in various ways so that they can accept the fact that a particular person died.

There is also another folk custom that judges whether there will be new dead through the changing color of makuradango. As Gorai said, such a belief helps us see makuradango as an offering of feast for evil spirits and existence aware of the fate of the dead. Further study of makuradango will be required.

Key words: Makuradango, taboo, death, offering, acceptance of death

---